

上田市文化財調査報告書 第31集

訛口上遺跡

訛口上遺跡緊急発掘調査報告書

1988. 3

上田市教育委員会
長野県神川沿岸土地改良区

上田市文化財調査報告書 第31集

訛口上遺跡

訛口上遺跡緊急発掘調査報告書

1988. 3

上田市教育委員会
長野県神川沿岸土地改良区

序

訛口上遺跡は、上田市の東部、町吉田地区の南東の水田地帯にある遺跡で、瀬沢川をはさんで東対岸には中吉田遺跡群という大遺跡のある地域にあります。

このたび、この地区一帯のは場整備事業が実施されることになり、上田市教育委員会では長野県教育委員会の指導のもとに、事業主体者である長野県神川沿岸土地改良区と協議を行い、事業地区内の訛口上遺跡の緊急発掘調査を実施することになりました。

調査は、団長を上田市文化財保護審議会委員の五十嵐幹雄先生にお願いし、昭和62年11月10日から11月27日までの約3週間にわたって実施しました。当初、事業地区内を北側から順次試掘をしていきましたが、遺構・遺物等が検出されず、一時は調査の中止も考えられました。そこで、試掘調査地区を南に下げたところ、ようやく奈良時代の住居跡や、溝址等の遺構や土師器・須恵器等の遺物が検出されました。

朝夕は特に冷込みの厳しい中、終始この発掘調査に御尽力いただいた五十嵐団長をはじめとする調査団の皆さん、御協力いただいた地元の自治会、は場整備実行委員会の皆さん、更に土地改良事業に当たられた長野県神川沿岸土地改良区ほか関係者各位に心から感謝を申し上げます。

昭和63年3月

上田市教育長 赤羽 審

例　　言

- 1 本書は、昭和62年11月10日から昭和62年11月27日にかけて発掘調査が実施された長野県上田市大字芳田字沢口上遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野県神川沿岸土地改良区の依頼を受けて、上田市教育委員会が主体となり国庫補助事業として行った。現場調査は沢口上遺跡発掘調査団に事業委託して実施された。
- 3 遺構実測図、遺物実測図の作成は倉沢正幸、中沢徳士、塩崎幸夫が行い、拓本、トレースは塩崎が行った。また、石器の実測、トレースには尾見智志氏の御協力を得た。
- 4 遺構、遺物写真は、塩崎が撮影したものを使用した。
- 5 本書の遺構断面図中の水糸レベルは、原則として原点—70cmに統一し、例外は図中に記した。水糸レベルの原点は、標高535.66mである。
- 6 本書の執筆分担は下記のとおりであるが、第4章第2節については文末に執筆者名を記しておく。

第1章	事務局
第2章	川上 元
第3章	倉沢正幸
第4章 第1節	塩崎幸夫
第2節	倉沢正幸・塩崎幸夫
結語	五十嵐幹雄

- 7 本書の編集は執筆者との協議により事務局が担当した。
- 8 本調査にかかる資料は、すべて上田市教育委員会の責任下に保管されている。
- 9 今回の調査において、現場調査中には長野県神川沿岸土地改良区、地元の方々より温かい御援助、御協力をいただいた。また、報告書作成に当たっては、たいへん多くの方々から数々の御指導、御助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。

目 次

序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
図版目次	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	1
第3節 調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 自然的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 層 序	6
第4章 調査の結果	7
第1節 調査の概略	7
第2節 造構と遺物	9
1 住居址	9
2 溝 址	11
3 土 壤	15
4 ピット	16
5 包含層出土遺物	18
図 版	19
結 語	

挿 図 目 次

第1図	沢口上遺跡の位置	4
第2図	沢口上遺跡基本層序模式図	6
第3図	沢口上遺跡トレンチ・発掘調査区域設定図	8
第4図	第1号住居址実測図	9
第5図	第1号住居址カマド実測図	10
第6図	第1号住居址出土遺物実測図(1)	10
第7図	第1号住居址出土遺物実測図(2)	11
第8図	第1～3号溝址実測図	12
第9図	第1号溝址出土遺物実測図	12
第10図	第3号溝址出土遺物実測図	13
第11図	第4号溝址実測図	14
第12図	第4号溝址断面実測図(TR-29内)	14
第13図	第1号土壤実測図	15
第14図	第1号七塙出土遺物実測図	15
第15図	第2号土壤実測図	15
第16図	第3号土壤実測図	16
第17図	包含層出土遺物実測図	18
第18図	沢口上遺跡遺構全体図	19

図 版 目 次

図版1	沢口上遺跡遠景(南西方より)・同(南方より)	23
図版2	沢口上遺跡全景(南東方より)・第1号住居址(北東方より)	24
図版3	第1号住居址(南東方より)・同址カマド(南西方より)	25
図版4	第1号住居址出土遺物	26
図版5	第1～3号溝址(北西方より)・同(南東方より) 第1号溝址出土遺物	27
図版6	第3号溝址出土遺物・第1号土壤(南西方より)・第1号土壤出土遺物	28
図版7	第2号土壤(南東方より)・第3号土壤(南方より)・ピットP-1～5 (南東方より)	29
図版8	ピット群(北西方より)・包含層出土遺物・沢口上遺跡発掘調査団	30

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和62年度、上田市下吉田地区に土地改良総合整備事業が計画され、その事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である訳口上遺跡が存在していた。このため、工事主体者である長野県神川沿岸土地改良区と長野県教育委員会、上田市教育委員会、その他の関係者で事前に保護協議を行い、工事施行前に緊急発掘調査を実施、記録保存を図ることとなった。

10月23日、上田市役所において調査団会議を開催し、調査の方法や時期等について打合わせを行った。その中で、遺跡の範囲について疑義が出され、発掘前に現地踏査を行ったが判明しなかったため、事業地区内を広範囲にわたってトレンチを入れることになった。

10月28日、地元の下吉田公民館で工事関係者、地権者と打合わせ会議を行い、発掘調査の内容について協議をし、地権者の同意や作業員の協力について依頼をした。

11月10日、発掘器材の搬入を行い、試掘を開始し、翌11日に搬入式を挙行し、本格的な調査を開始した。

第2節 調査の体制

上田市教育委員会は、新たに訳口上遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査を同調査団に事業委託して調査を実施した。

調査団の構成及び調査協力者は次のとおりである。

訳口上遺跡発掘調査団名簿

團長	五十嵐幹雄	(上田市文化財保護審議会委員・日本考古学协会会员)
調査主任	川上 元	(上田市立博物館庶務学芸係長・日本考古学协会会员)
調査員	倉沢正幸	(上田市立信濃國分寺資料館学芸員)
◆	中沢徳士	(社会教育課学芸員)
◆	塙崎幸夫	(長野県考古学会会員)
事務局長	清水万伴	(社会教育課長)
事務局次長	内藤良典	(社会教育課文化係長)
事務局員	中沢徳士	(社会教育課学芸員)

調査協力者

下林武雄・林嘉蔵・下林定好・林新一・加藤今朝松・堺沢新・中山学・池上きみ子・林きかえ・黒岩政子・長浜清吉・豊岡亨・清水いさを・金井ひろ子・下林松江・黒岩宰司米・池上喜一・豊岡重徳・豊岡親子・大久保よし・下林綾子・青木慶治・林正則・丸山利徳・豊岡今朝茂・松下まちよ・小林房代・塙原恒昭・青木愛子・丸山悦子・林義徳・中山はずよ・林まさご・柳沢玉代・林征・池田才次郎・高橋仁美・坂巻ケン子・上野良幸・堀内節子・小笠原みゆき・下吉田地区ほ場整備事業実行委員会

(順不同)

第3節 調査日誌

昭和62年

- 11月10日(火)【快晴】 発掘器材搬入。調査方法確認の後、試掘トレチTR-01~04を設定し、掘り下げる。
- 11月11日(水)【晴】 鍬入式。試掘トレチTR-05~23設定後、重機により掘下げ。トレチ内清掃、精査。
- 11月12日(木)【晴】 トレチ内清掃、精査。TR-01~05セクション実測。TR-23から黒色包含層と遺構確認。カマド右袖検出。
- 11月14日(土)【曇】 TR-24~30設定。TR-23を重機により拡張、住居址・溝址・ピットを検出する。
- 11月16日(月)【晴】 テント・器材をTR-23北側に移動。TR-23を重機により引き続き拡張。上層・ピット検出。TR-24~30清掃、精査。
- 11月17日(火)【晴】 TR-23を重機により引き続き拡張。
- 11月18日(水)【晴】 グリッド設定、遺構検出作業。
- 11月19日(木)【曇時々晴】 グリッド設定、遺構検出作業。遺構掘下げ。SB-01のカマド・床面検出。
- 11月20日(金)【快晴】 遺構掘下げ。SB-01のカマド切開・実測。プラン検出作業。
- 11月21日(土)【快晴】 SB-01全掘。SK-01・ピット掘下げ。プラン検出作業。
- 11月24日(火)【快晴】 SD-01~03掘下げ。SK-01~03セクション実測・全掘。
- 11月25日(水)【快晴】 SD-01・03掘下げ。土壌・ピットなど全掘。遺構実測を適り方で始める。
- 11月26日(木)【晴】 遺構清掃後、全体写真撮影。器材撤収始める。
- 11月27日(金)【曇のち雨】 遺構実測。器材撤収。

現場での調査は11月27日に終了し、これ以後、上田市立信濃国分寺資料館において出土遺物の整理、報告書の作製作業を行った。昭和63年3月24日調査報告書を刊行し、発掘調査は終了した。

第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

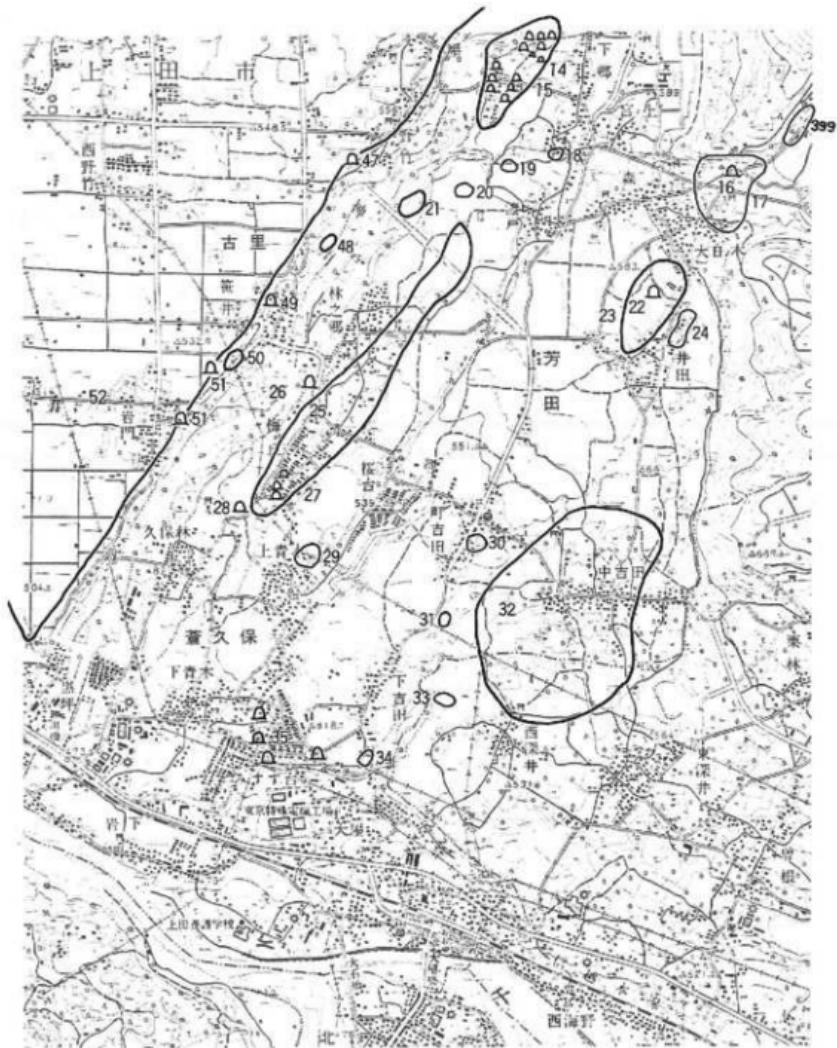
今回調査を実施した訳口上遺跡は、地形的に見ると大きくは千曲川以北に展開する上田盆地における川東平野の東側に位置しており、神川左岸の神川扇状地と呼ばれる地域に所在している。ここは、上田盆地の北東部にそびえる四阿山(2332m)に源を発する神川によって形成された一大扇状地形を呈したところで、矢沢の狹隘部の標高約580mを頂点として半径4kmの規模で南方に広がり、その扇状部は約500mの等高線をもって段丘崖となって終わっている。神川の流路が次第に西に偏したため、ここに見事な三段の段丘を形成している。すなわち、第1段丘面は現河床面より約20~30mの比高をもち、森、大日ノ木、小井田、町吉田などの各集落が立地する広い面で、通称吉田面といわれる。近年この段丘崖に沿って桜台・みすず台などの住宅団地もできて、様相が一変してきた。この面の地質は神川の運んだ厚い砂礫層からなり、地表面は1~2mほどの厚さをもつローム層に覆われている。古い時代からこの面も、神明川や瀬沢川から水を取り入れたり、また、吉田城の開削などによる開拓がなされたため、立派な水田地帯となっているが、上水道が出来る前まではとくに町吉田地域では飲料水に困ったという。第2段丘面は第1段丘より約10~12m低く形成されているが、この面も比較的広く林之郷や上青木など五つの集落があり、林之郷面と呼ばれている。いくつかの用水堰に恵まれているため、同様に広い水田地帯となっている。また、第3段丘面は現在の神川の氾濫原としての比較的小規模な平坦であるが、久保林集落のあるところでは2~3m高い微段丘となり安全な平坦地となっている。久保林面といわれている。ここもやはり、近年宅地化が進行してきているといえる地域である。

ところで訳口上遺跡は、この第1段丘上の町吉田集落南側の下古田に通じる道路際の水田地帯の、標高約535mを計る上田市大字芳田字訳口上に所在する。遺跡のすぐ東側には瀬沢川が北から南に流れ、谷地形を造っているが、実はこの谷を境にしてその東側は、烏帽子、三方、高峯などの広い南麓裾野としての押出し扇状地が展開して、神川扇状地面と地形を画しているのである。

なお、今回確認された遺跡の北約200mのところに、下流の水田地帯へ引用水を公平に配分する用水堰の分配施設がみられ、水に苦心をしたかつての歴史を垣間見る思いがするのである。この地の字名である「訳口」もこのへんに由来するといわれている。

第2節 歴史的環境

上田市域の東側にあるこの一帯の考古学的遺跡をみてみると、全体的には烏帽子岳西南麓の扇



第1図 許口上遺跡の位置 (1/25,000 國土地理院発行)

14	神林遺跡	24	尾無遺跡	34	いなご坂遺跡
15	下郡古墳群	25	林之郷遺跡	35	吉田原古墳群
16	大日の木古墳	26	日ノ井古墳	47	野竹塚古墳
17	大日の木遺跡	27	高寺古墳群	48	蘇井久保遺跡
18	北の平遺跡	28	生地塚古墳	49	猿井塚古墳
19	ヤチ原遺跡	29	中村II遺跡	50	掛の宮遺跡
20	堂下遺跡	30	荒神田遺跡	51	掛の宮塚古墳
21	太田遺跡	*31	許口上遺跡	52	染谷台桑里水田跡遺跡
22	柴崎古墳	32	中吉田遺跡	399	水沢遺跡
23	井戸田遺跡	33	今井遺跡		(番号は長野県の遺跡番号による)

状地に分布する遺跡としてとらえられ、縄文期から奈良・平安期に至るまでかなりの数をあげることが出来る。しかし、前述した神川層状地第1段丘面の、特に町吉田集落を中心とした地域は、比較的その分布が希少といえる。これはまた、ここが耕地としての水田が多く、畑地が少ないため遺跡の確認が難しいからかもしれない。事実今回の発掘調査も、表探されている遺物が少ないため、遺跡地点の特定にやや手間取った。

近接する遺跡を概観すると、まず町吉田集落内に確認されている荒神田遺跡があげられる。わずかな畑地内から平安期とみられる土師器・須恵器片が少量表探されたのみであり、その性格は把握できないが、距離的にみて、あるいは今回調査した沢口上遺跡と一連の遺跡と考えることが出来るかもしれない。また、南側の段丘崖下には縄文期の石鎚が採集されているイナゴ坂遺跡があるが、ここも資料的にわずかなため明確ではない。更に南側段丘崖のみすず台古墳地のほぼ中央部には、下青木吉田原古墳を中心としたいわゆる吉田原古墳群がある。本古墳の墳丘は東西15m、南北13m、高さ4mの円墳で、石室内部は玄室と羨道の区別がはっきりした両袖形で、石室の総長6.6mを計る横穴式石室をもち市指定となっている。このほか周辺には、旗鉢塚古墳、寺沢古墳、尾撫古墳などの古墳時代後期の古墳がかつて存在したというが、団地造成等で失われてしまい今は無い。

このほか第1段丘面でみると、北側のやや離れた小井田集落を中心とした、井戸田、尾無、戎田などの各遺跡があり、それぞれ豊富な資料が採集されている。つまり井戸田からは、縄文中期加曾利E式土器片・石鎚・打製石斧・凹石・砥石、弥生後期箱清水式土器片及び土師器・須恵器などが出土している。また、尾無も同様に縄文中期土器・土師器などがみられるし、戎田からも平安期とみられる土師器片が出土している。

しかし、沢口上遺跡と最も近接した位置にあり、しかも最も豊富な資料を提供しているのは、何といっても中吉田集落一帯に広がる中吉田遺跡群である。瀬波川の東側対岸にあり、地形的には前述したように鳥帽子山麓西南斜面の層状地にある遺跡としてとらえられる。遺跡群の中心は、治郎淵と無量寺の両遺跡である。前者からは縄文中期勝坂式土器片、弥生後期箱清水式土器片、土師器・須恵器類が出土している。また、ここから子持勾玉も検出されており、特に注意される遺跡である。更にまた、後者からは縄文中期加曾利E式土器、弥生後期土器、土師器・須恵器類などが採集されており、治郎淵遺跡とほぼ同じ内容を示している。したがって、この両遺跡は場合によっては一体の遺跡と考えられるのである。なお、無量寺から見つかっている、加曾利E期に比定される台付有孔鷹付土器も、この地における代表的土器資料としてあげられる。

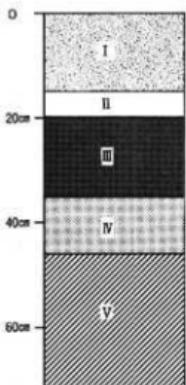
このほか、神川層状地の第2段丘面にも幾つかの遺跡があり、また、多くの考古資料も発見されている。こうしてみると、先に述べたようにこの神川層状地一帯には、比較的多くの考古遺跡が存在することになるのである。沢口上遺跡はこのような考古的環境のなかに位置しているのである。

第3章 層序

沢口上遺跡は神川の第1段丘上に位置している。遺跡の標高は534m～538mを測り、現在の地形は北から南側へかけて緩やかに傾斜している。この地形は水田造成時にかなり削平や盛り土がなされたとみられている。調査トレンチ TR-23の層序は次のとおりである。

第23トレンチ

- 第Ⅰ層 耕作土層で、暗灰褐色を呈す。粘性でしまりはない。層厚約15cm。
- 第Ⅱ層 暗茶褐色土層。溶脱層で、粘性がある。層厚5～10cm。
- 第Ⅲ層 黒褐色土層。粘性がなく、しまりがある。層厚は最大約15cmで南東部が厚い。
- 第Ⅳ層 暗黄褐色土層。粘性で、しまりはない。層厚は約10cm。
- 第Ⅴ層 明黄褐色土層。この層上面が遺構検出面である。



第2図
沢口上遺跡基本層序模式図

第4章 調査の結果

第1節 調査の概略

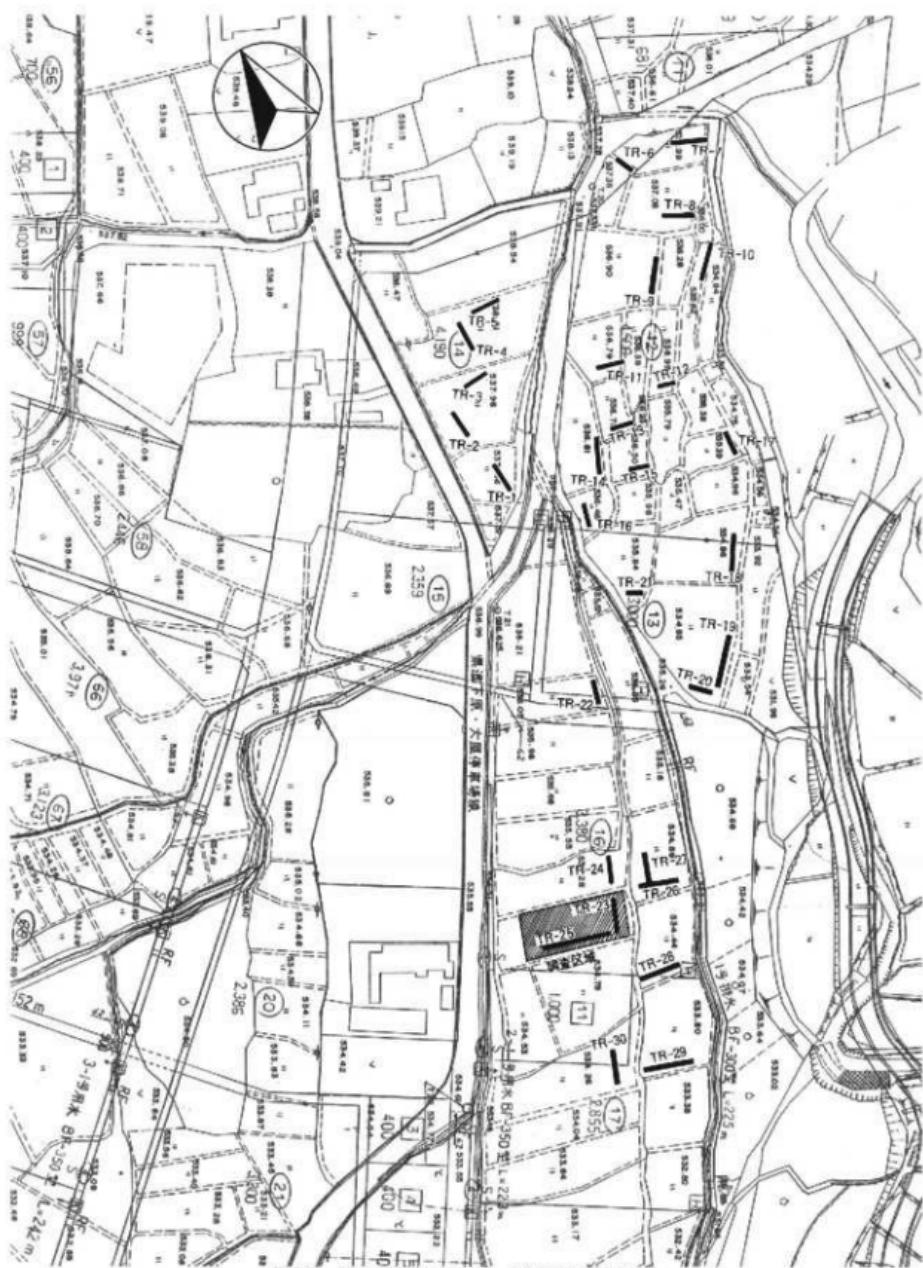
訳口上遺跡は、町吉田集落の南端から南東の水田地帯にあたり、後期の土師器・須恵器などの遺物がわずかに表採される埋蔵文化財包蔵地として知られていた。今回、この地域一帯のは場整備事業により遺跡が消滅することになり、事前に発掘調査を実施して、記録保存を図ることになった。

本遺跡は従来、遺跡の範囲が明確でなかったため、調査団では数度にわたり表面探査調査と地元の方々への聞き込みを行ったが、地元では遺物の出土は全く知られておらず遺跡の存在を確認することができなかった。

そこで、遺跡存在推定範囲全域にトレンチ方式による試掘を実施し、遺構の存在、遺物の出土状況等について調査することにした。試掘は訳口上地籍北端より順次実施されたが、TR-1~22においては、全体層序第Ⅱ層の溶脱層より下層は全体層序第Ⅳ・V層のローム層、或は明黄褐色砂礫層となり、遺構・遺物は全く知ることができなかった。しかし調査開始3日目にして、最南端に設定したTR-23において黒褐色の遺物包含層と住居址、溝址等と推定される遺構を確認することができた。その後、TR-23の周囲にTR-24~30を設定し調査を実施したが、遺構・遺物の出土状況からTR-23(25)付近の限られた地域が遺跡の中心部であるとの結論に達し、同地域で発掘調査を実施することにした。

発掘調査はTR-23・25を中心約300m²の範囲をグリッドによる平面発掘で行うこととし、重機により表土を剥ぎ取り、3m×3mのグリッドを設定した。グリッド番号は北一南方向に1・2・3……、西一東方向にA・B・C……とした。

調査の結果、竪穴式住居址1軒(SB-01)、溝址4本(SD-01~04)、土壙3基(SK-01~03)、ピット40基(P-01~40)の各遺構が検出され、縄文土器、土師器、須恵器等の遺物が出土した。残念ながら遺物の出土量は全体に僅かで、遺構の時期や性格が充分把握できないものもあったが、訳口上遺跡が縄文時代中期と奈良時代前期の2期にわたる遺跡であったことが確認され、予想以上の成果を取ることができた。また、遺跡の分布が比較的希薄であるとされてきた神川第1段丘面において小規模ながらも遺跡を調査し、記録に留めることができたことは貴重な成果であったと言えよう。



第3図 訓口上遺跡トレンチ・発掘調査区域設定図

第2節 遺構と遺物

1. 住居址

(1) 第1号住居址 (SB-01)

遺構 (第4・5図)

本住居址は、トレーナーTR-23において確認され、調査区の南東隅部、グリッドH・I列の8・9にまたがって位置している。南側が調査区外となっており未調査であるが、南側の水田は「おさぬき」によりかなり削平されているため、遺構は遺存していないものと推測される。

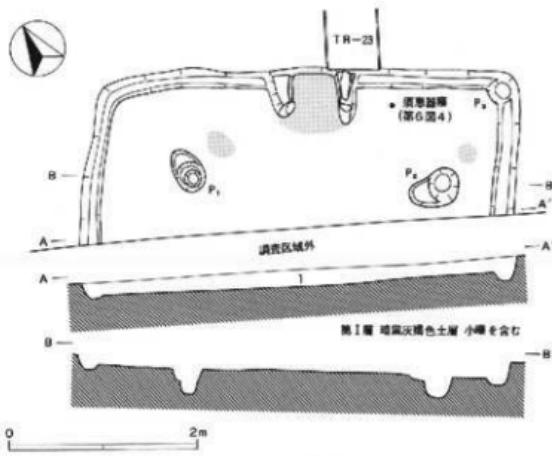
平面プランは、カマドを中心とする主軸方向をN-31°-Eに持つ隅丸方形と推定される。北壁は4.56mを測る。残存する壁高は10~15cmを測り、壁は垂直に近く立ち上がる。床面はほぼ平坦で堅緻であった。覆土は若干の小礫を含む暗黒灰褐色の單一層であった。

カマドは北壁のほぼ中央部に設けられており、右袖2個、左袖1個の河原石を用いた石芯粘土カマドである。遺存状況は比較的良好で、煙道部は検出されなかったが、壁面からの規模は右袖58cm、左袖50cm、両袖幅93cmを測る。火床中央部には細長い自然石を用いた支脚石が奥壁側に倒置した状態で検出された。なお、本カマドの火床は住居址床面をそのまま使用しており、住居址北壁沿いに周溝も検出されたことから、カマドの構築は住居址の床面や周溝の構築後に行われたことが窺われる。また、後述するP₁・P₂の東側にそれぞれ20~30cmの範囲で若干の焼土が検出されたが、その性格は明確に

し得なかった。

ピットは3基検出された。このうちP₁・P₂は主柱穴と考えられ、いずれもテラスを有して26~30cmの深さを測る。P₁・P₂の柱間隔は2.68mを測る。P₁は住居址北東隅部に位置し、深さは19cmを測る。

周溝は、前述したカマド下部も含めて調査した区域を全周しており、幅14~22cm、深さ3~9cmを測る。



第4図 第1号住居址実測図

なお、本住居址の周囲には第1号溝址が2.4～2.8mの間隔を置いて巡っている状態で検出されており、本住居址の屋外周溝としての機能を果たしていたのではないかと推測される。

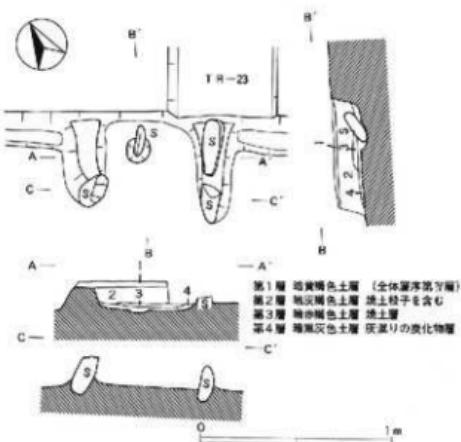
遺物の出土状況は、カマド東側より須恵器甕の口頭部（第6図4）が床着で出土した以外は、土師器、須恵器の小片が若干出土したのみである。

本址の所産期は、住居址形態、出土遺物等から奈良時代前半と推定される。

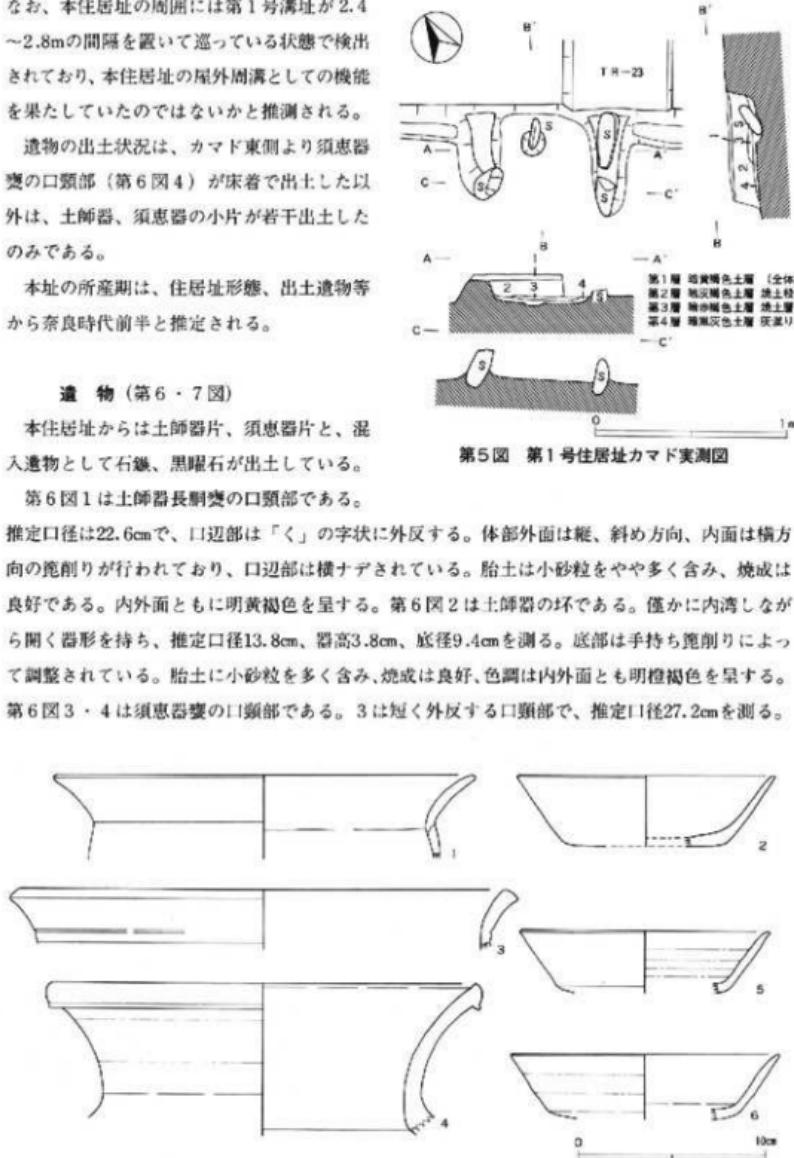
遺物（第6・7図）

本住居址からは土師器片、須恵器片と、混入遺物として石礫、黒曜石が出土している。

第6図1は土師器長胴甕の口頭部である。推定口径は22.6cmで、口辺部は「く」の字状に外反する。体部外面は縦、斜め方向、内面は横方向の範削りが行われており、口辺部は横ナデされている。胎土は小砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。外面ともに明黄褐色を呈する。第6図2は土師器の壺である。僅かに内湾しながら開口器形を持ち、推定口径13.8cm、器高3.8cm、底径9.4cmを測る。底部は手持ち範削りによつて調整されている。胎土に小砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は外面とも明橙褐色を呈する。第6図3・4は須恵器甕の口頭部である。3は短く外反する口頭部で、推定口径27.2cmを測る。



第5図 第1号住居址カマド実測図



第6図 第1号住居址出土遺物実測図(1)

外面は明黄灰色、内面は明白灰色を呈し、焼成はやや不良である。4は口頭部のみの完存品で、カマド東脇より正位、床着の状態で出土した。口径は22.6cmを測り、色調は外面が暗青灰色、内面が暗灰色を呈する。胎土に小砂粒、小礫を多く含むが、焼成は良好である。以上その他に、図示できなかったが、3よりわずかに長い口辺部を持つ壺の口頭部片1点と、平行叩き目痕を有する胸部片が数点出土している。第6図5・6は須恵器の壺である。共に口縁部の外反する器形を呈し、5は推定口径13.4cm、器高3.5cm、底径9.2cmを測る。胎土に小砂粒を含み、焼成は良好で、色調は内外面とも青灰白色を呈する。5は推定口径14.4cm、器高3.8cm、底径10.2cmを測る。胎土に小礫を含み、焼成はやや不良である。色調は内外面とも明灰白色を呈する。5・6の底部調整は、器面の風化が著しいため明確ではないが、回転窓削りで調整されたものと推測される。

第7図1は混入遺物の石鎌である。黒曜石製で茎部を欠損しているため全体の形態は不明であるが、丁寧な調整が行われており、残存部の長さ26.4mm、幅15.2mm、厚さ4.1mm、重量1.5gを測る。その他、一部に加工痕を有する黒曜石剝片が1点出土している。

以上の出土遺物のうち、第6図4の須恵器壺については、その出土状況と同一個体片が1点も出土していないことなどから、破損した壺の口辺部を什器の置き台などに再利用した可能性が想起される。

(塩崎幸夫)



第7図 第1号住居址
出土遺物実測図(2)

2. 溝 址

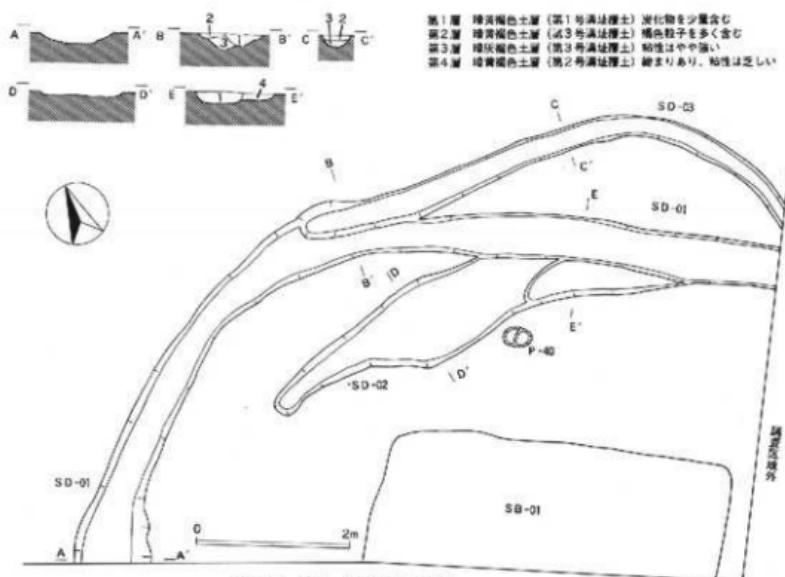
(1) 第1号溝址 (SD-01 第8・9図)

本溝址は、調査区東南部、グリッドG～J列の7において検出された。第2、3号溝址と重複関係を有しており、両者を切って構築されている。G-7の調査区南端より緩い弧を描きながら北東に伸び、H-7で屈曲して南東方向に直線的に伸びて調査区域外へと続いている。調査区域内において調査された範囲は10.6mの範囲である。

溝幅は調査区南端の最も広い部分で100cm、その他の部分で45～75cmを測る。確認面からの深さは8～16cmを測り、断面形は扁平な鍋底状を呈する。覆土は炭化物を少量含んだ粘性に乏しい暗黄褐色土の單一層である。水の流れた痕跡は認められなかった。

本溝址の性格については、金形が把握できないため即断はできないものの、溝跡の原地形が北方から南方にかけてかなりの傾斜地であったことが推測されるところから、水路とするには不自然である。むしろ、ほぼ同方向で本址が併んでいる第1号住居址との関連が想起される。

本溝址からは、土師器片、須恵器片が若干出土している。それらのうち図示できたのは2点である。第9図1は土師器の内黒坏である。底部は手持ち窓削りで調整され、丸底氣味に仕上げら



第8図 第1～3号溝址実測図

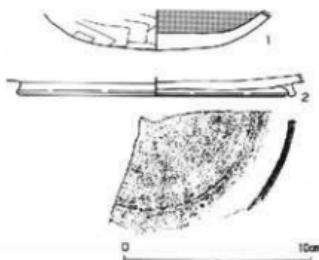
れている。内面は黒色研磨されている。胎土に小砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面は暗黄灰褐色を呈する。2は須恵器の盤である。底径は14.4cmを測り、底部は全面が回転窓削りで調整され、高台が付けられている。胎土、焼成は良好で、色調は外面が暗茶灰色、内面が明灰色を呈している。以上の他に、土師器の長脣甌や环、須恵器の甌などの小破片が出土している。

本遺構の所産期は、出土遺物から奈良時代前半に比定される。

(2) 第2号溝址 (SD-02 第8図)

本溝址は、調査区東南部、グリッドH～J列の7において第1号溝址に切られて検出された。わずかに弧を描きながらほぼ東西に延びる全長6.0mの遺構で、H-7で始まり、J-7で第1号溝址と合流するようにして終結している。

西側が細くなっている、溝幅は30～112cmで、確認面からの深さは3～12cmを測る。断面形は幅



第9図 第1号溝址出土遺物実測図

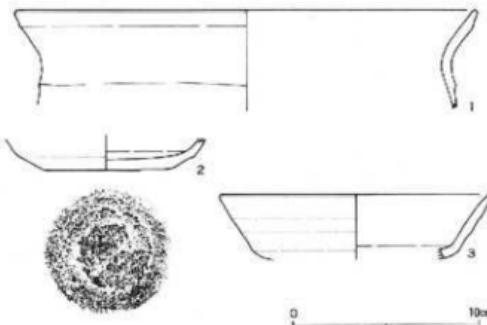
平な半月形を呈しており、底部は不整である。覆土は暗黄褐色土の單一層で、水の流れた形跡は認められなかった。遺物の出土は無く、所産期、性格等は不明である。

(3) 第3号溝址 (SD-03 第8・10図)

本溝址は、調査区東南部、グリッドH～J列の7において第1号溝址に切られて検出された。H-7で第1号溝址と重複して始まり、次第に細くなりながら東走してJ-7で「く」の字状に屈曲して調査区域外に続いている。調査区域内において調査された部分は、7.0mの範囲である。

溝幅は25～48cmで、確認面からの深さは11～20cmを測る。断面形は鍋底状を呈する。覆土は2層に分けられ、上層は褐色粒子を多く含んだ暗黄褐色土、下層は締まりに乏しい暗灰褐色土であった。水の流れた痕跡は認められなかった。

本溝址からは、土師器片、須恵器片が出土している。遺物の出土量は比較的多かったが、図示し得たのは土師器1点と須恵器环2点のみであった。第10図1は土師器長胴甕の口頭部である。口縁部外面に僅かに段を有し、口辺部は「く」の字状に外反している。体部は斂削りにより極薄に仕上げられており、推定口径は24.8cmを測る。胎土に小砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は外面が明橙褐色、内面が明黄褐色を呈している。2・3は須恵器の環である。



第10図 第3号溝址出土遺物実測図

2は底径6.8cmを測り、胎土、焼成とも良好である。色調は外面が明灰色、内面が暗灰色を呈する。底部は斂削り後、周囲のみ手持ち斂削りによって調整されている。3は推定口径12.6cm、器高3.7cm、底径8.8cmを測る。口縁部で僅かに外反し、口縁端部に薄く自然釉が掛かっている。胎土、焼成は良好で、色調は外面が暗青灰色、内面が明灰白色を呈している。底部は回転斂削りによって調整されている。以上の他に土師器小形甕、第9図1とほぼ同形態の土師器内黒坏、平行叩き目痕を持つ須恵器甕などの小破片が出土している。また、土師器長胴甕の胴部破片には器壁3～4mmの薄いタイプと7～9mmの厚いタイプの2種が認められた。

本溝構の所産期は、出土遺物から奈良時代前半に比定される。

(4) 第4号溝址 (SD-04 第11・12図)

本溝址は、トレンチTR-26において検出され、重機によるトレンチ調査の結果、TR-26～29において確認された。調査区域東側を北東から南西にかけて位置しており、更に上下に続いている。

当初、より詳細な調査を実施する予定であったが諸般の事情により、今回は遺構を確認するに留めた。

溝幅は6.5~8.2mを測り、TR-29における深さは確認面より約75cmを測る。

西側に最深部を持ち、壁は西側でしっかりと立上がるものの、東側では緩やかに立上がる。覆土は概ね6層に分けられ、その大半を黒褐色砂質土層が占め、下部に壁の流れ込みと思われる明黄褐色粘質土層や、暗黄褐色砂礫層が認められた。

本溝址からは、縄文時代中期後半に比定される縄文土器片が最深部より2点出土しているが、磨滅が著しく図示し得るものは皆無であった。

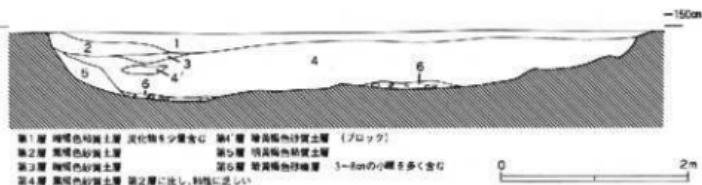
本遺構は、かなり規模の大きい水路であったことが推測されるが、人為的な水路か否かは明確にし得なかった。また、

所産期についても出土遺物が遺構外から流れ込んだ可能性があるため明確ではない。なお、本溝址の存在する水田面は、西側の水田に比べいずれも一段低くなってしまっており、東側に現在同一方向に用水路が流れていることなどから、本遺構は新田開発のために埋め立てられ、東側に改修されたものと推測される（第3図参照）。



第11図 第4号溝址実測図

（塩崎幸夫）



第12図 第4号溝址断面実測図 (TR-29内)

3. 土 壤

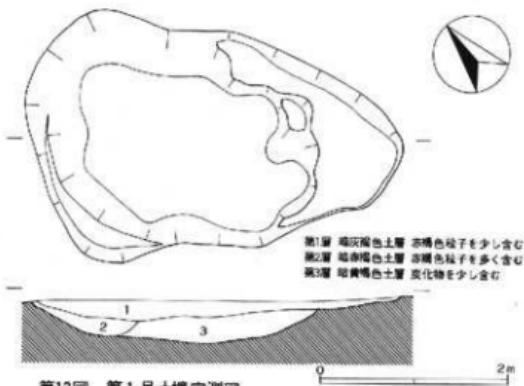
(1) 第1号土壤 (SK-01 第13・14図)

本土溝は、調査区東側中央部、グリッドG・H列の5・6にまたがって検出された。平面プランは長軸方向をN-46°-Wに持つ408×272cmの不整隅丸三角形を呈している。東西にテラスを有し、中央部の断面形は西側で深くなる緩い鍋底状を呈する。深さはテラス部で5~15cm、中央部で48cmを測る。覆土は3層に分けられ、第1層は赤褐色粒子を少量含む暗灰褐色土、第2

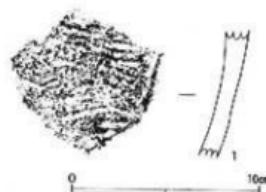
層は赤褐色粒子を多く含んだ暗赤褐色土、第3層は少量の炭化物を含んだ暗黄褐色土である。本土壤の所産期は、縄文時代中期後半に比定される縄文土器片が数点出土していることから該期に求められよう。

(2) 第2号土壤 (SK-02 第15図)

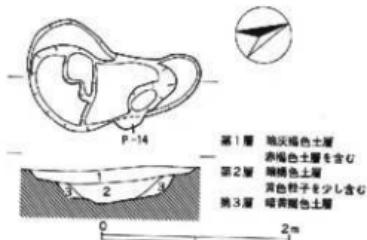
本土壤は調査区南部、グリッドD列の5・6にまたがって検出された。P-14と重複関係を持ち、東壁の一部を切られている。平面プランは、長軸方向をN-23°-Eに持つ188×120cmの不整円形を呈する。西側と北側にそれぞれテラスを有しており、テラス部を除いた断面形は底部の不整な鍋底状を呈する。深さはテラス部で3~7cm、中央部で37cmを測る。覆土は3層に分けられ、第1層が赤褐色粒子を含んだ暗灰褐色土、第2層は黄色粒子を少量含んだ暗褐色土、第3層は暗黄褐色土であった。遺物の出土は無く、所産期、性格等は不明である。



第13図 第1号土壤実測図



第14図 第1号土壤出土遺物実測図

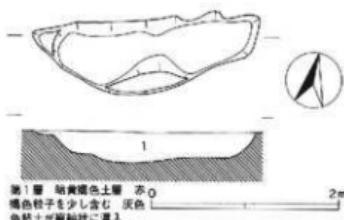


第15図 第2号土壤実測図

(3) 第3号土壤 (SK-03 第16図)

本土溝は、調査区西侧中央部のグリッドC-4より検出された。平面プランは長方方向をN-76°-Eに持つ243×78cmの狭長な半月形を呈する。中央部南壁側と西側にテラスを有し、テラス部を除いた断面形は鍋底状を呈する。深さはテラス部で6~18cm、最深部で36cmを測り、底部はやや不整である。覆土は赤褐色粒子を少量含んだ暗黄褐色土の單一層で、灰白色粘土が縦縞状に混入していた。遺物の出土は無く、所産期、性格等は不明である。

(塙崎幸夫)



第16図 第3号土壤実測図

4. ピット

本遺跡から検出されたピットは合計40基で、各ピットの計測値は別表のとおりである。これらのピットの平面形は略円形、楕円形、不整円形の柱穴状を呈している。ピット群は発掘区域の中央部分に特に集中して検出されたが、規則性や出土遺物は乏しく、明確に掘立柱建物址を構成するピット群は認められなかった。ただし、調査区域北西寄りのP-01~05の構成はやや規則性がみられ、主軸方向がN-25°-Eの掘立柱建物址の可能性も考えられる。特に、調査区域の北西側は水田造成の際にかなり削平されており、検出できなかった柱穴が存在した可能性がある。また、P-22、26、28、33の一一群と、P-35、36、38、39の一一群も1間×1間の掘立柱建物址との推定も当初なされたが、柱穴間の距離が2.7mから3.6mと離れており、柱穴も小さく、掘立柱建物址と明確に認めるることはできなかった。これらのピットからの出土遺物はごくわずかであり、P-14、15、17、34から土師器片が出土している。これらの出土した遺物はいずれも奈良時代前半に比定される土師器片である。

ピット一覧表

番号	グリッド名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
01	C-2	略円形	18	16	13		
02	B-3	タ	24	22	18		
03	D-3	タ	15	14	8		
04	C-3	タ	22	22	13		
05	C-4	タ	24	23	13		
06	D-4	タ	24	23	16		

番号	グリッド名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
07	D-4	略円形	26	26	7		
08	D-5	△	26	24	27		
09	E-3	△	17	16	13		
10	F-3	△	20	20	13		
11	E-4	△	30	28	12		
12	E-4	△	24	21	9		
13	E-5	△	20	18	10		
14	D-5	△	32	30	23	土師器環片(内側 手縫ちハラケズリ)	西南にテラスあり
15	E-6	△	26	26	23	土師器片2点(上部 内側)	
16	E-5	△	28	26	27		
17	E-5	楕円形	30	22	15	土師器片	
18	F-5	略円形	28	28	17		
19	F-5	△	24	23	19		
20	F-5	△	28	28	9		
21	F-5	楕円形	26	18	13		
22	F-5	略円形	48	42	10		底面に小ピットあり
23	F-4	△	25	24	30		
24	F-4	不整円形	22	20	7		
25	F-4	略円形	26	25	11		
26	G-4	楕円形	52	38	8		
27	H-4	略円形	26	24	16		P-28を切る
28	H-4	△	48	42	22		底面に小ピットあり
29	G-5	△	28	23	11		
30	G-5	△	26	25	13		底面に小ピットあり
31	G-5	△	14	12	7		
32	G-5	△	22	18	15		
33	G-5	△	48	38	15		
34	H-5	△	32	30	34	土師器環片(内外面ともに 茶色済)	西側にテラスあり
35	H-6	△	30	28	22		
36	H-5	△	30	30	25		
37	I-4	楕円形	55	34	30		底面にピット2個あり
38	I-5	略円形	34	32	32		
39	I-6	△	35	33	36		
40	I-7	楕円形	36	27	39		北面にテラスあり

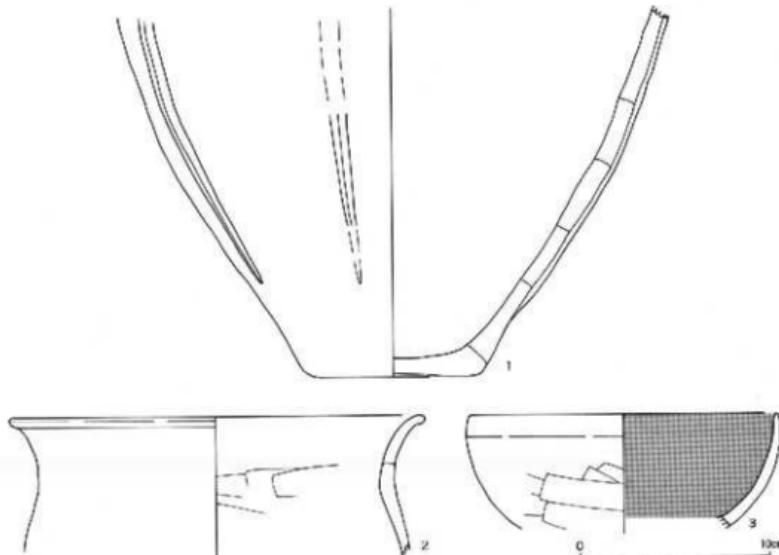
(食沢正幸)

5. 包含層出土遺物

包含層からの出土遺物には、縄文土器片、土師器片、須恵器片などがある。本遺跡では全体に『おさぬき』などに伴う耕地整理のため、遺物包含層はほとんど失われており、調査区域においては東側の一部に僅かに遺存しているのみであった。したがって、量的にも極めて少なく、図示したのは縄文土器 1 点、土師器 2 点のみであった。

縄文土器（第17図 1）は表土剥ぎの際にグリッド E-6より一括して出土した深鉢形土器で、磨滅が著しい。胎土に小砂粒を多く含んだ砂質で脆い土器で、色調は外面とも明茶褐色を呈しており、内面には暗褐色の付着物が看取される。底部は9.2cmを測り、胴部には推定 7 本の隆線が垂下している。隆線以外の施文は磨滅が著しいため不明である。縄文時代中期後半に比定されるものと推測される。土師器 2 点はグリッド J-7・8 付近の黒色土層中より出土した。第17図 2 は推定口径 22.2cm を測る壺の口頭部で、口辺部は緩く外反する。体部は比較的厚く、内外面窪削りで調整されている。胎土には小砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面とも明橙褐色を呈する。3 は推定口径 16.2cm を測る椀で丸く内湾して開き、口縁部外面に僅かに稜を持つ。内面は黒色研磨されており、外面は窪削りが行われている。胎土に若干の小砂粒を含み、焼成は良好である。外面は暗灰褐色を呈する。以上に他に土師器坏、須恵器の壺、环、小形壺などの小片も出土している。

（塩崎幸夫）



第17図 包含層出土遺物実測図



第18図 許口上遺跡遺構全体図

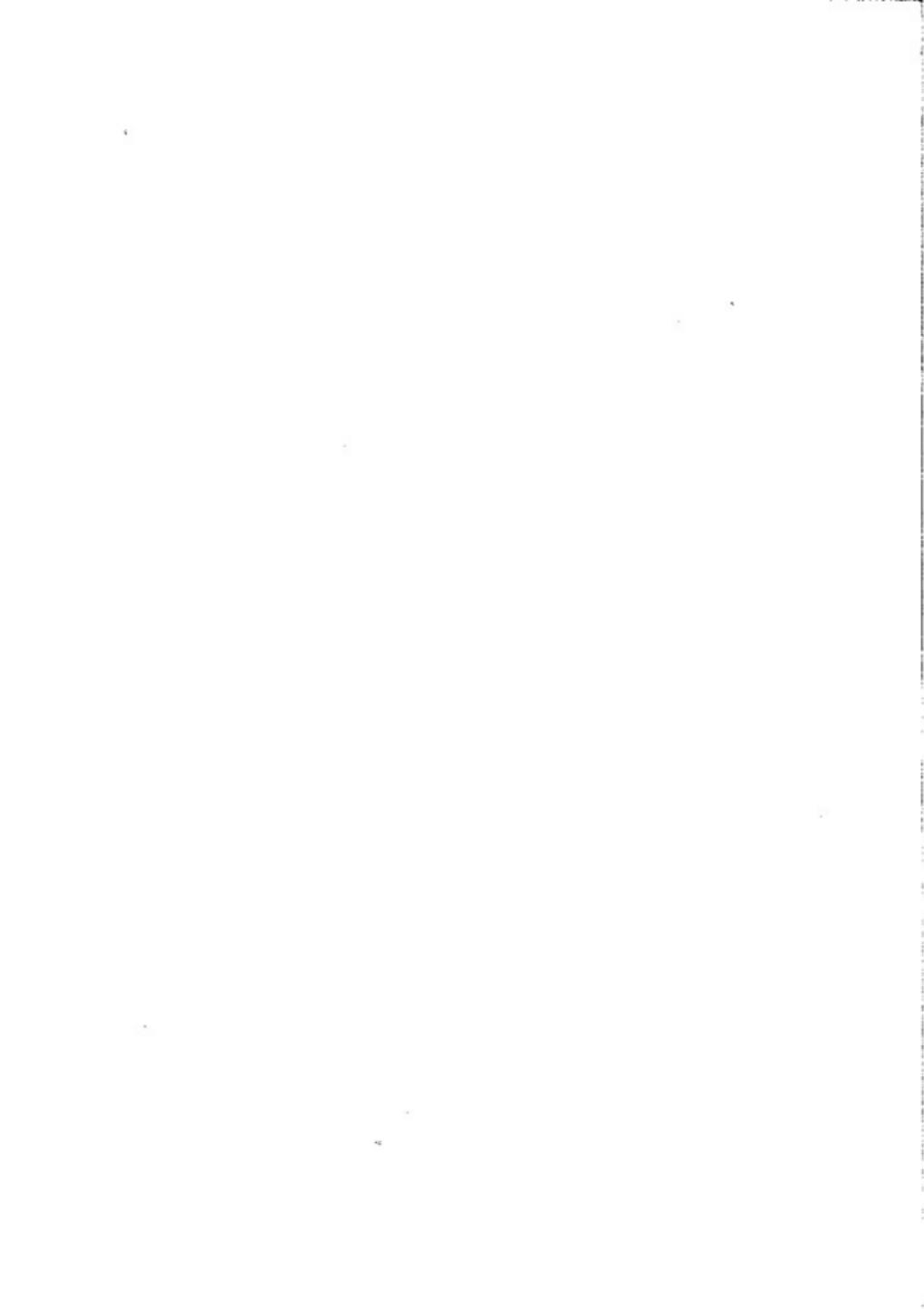


図 版



詫口上遺跡遠景(南西方より)



詫口上遺跡遠景(南方より)



訛口上遺跡全景(南東方より)



第1号住居址(北東方より)



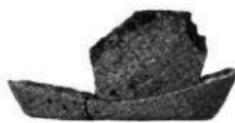
第1号住居址(南東方より)



第1号住居址カマド(南西方より)



6-1



6-2



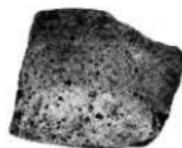
6-3



6-4



6-5



6-6



7-1

第1号住居址出土遺物



第1～3号溝址(北西方より)



第1～3号溝址(南東方より)

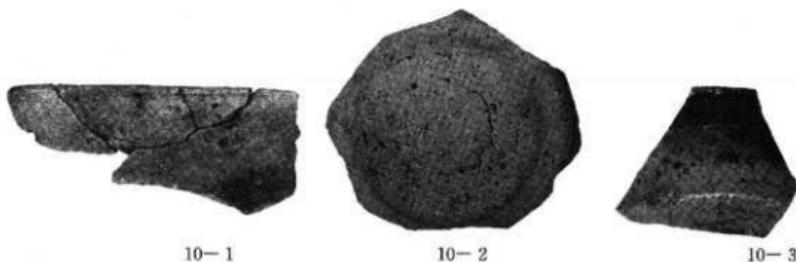


9-1



9-2

第1号溝址出土遺物



第3号溝址出土遺物



第1号土壤(南西方より)



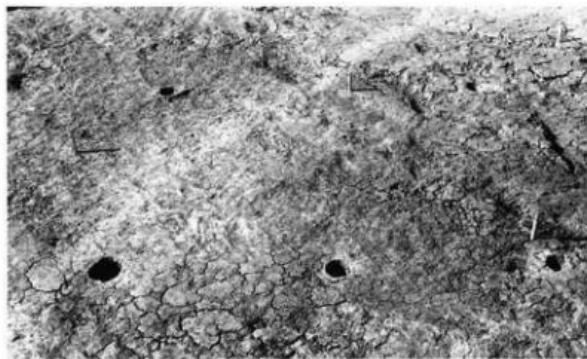
第1号土壤出土遺物



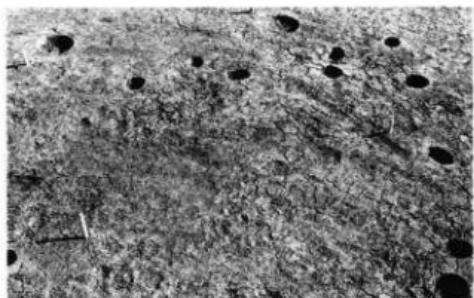
第2号土壤(南東方より)



第3号土壤(南方より)



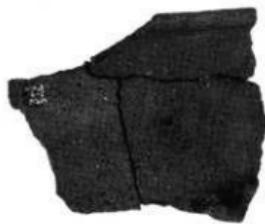
ピットP-01~05(南東方より)



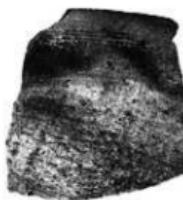
ビット群(北西方向より)



17-1



17-2



17-3

包含層出土遺物



沢口上遺跡発掘調査団

結語

前章ところどころに述べられているように、「訳口上」遺跡は周知の遺跡であったことから、今回の緊急発掘調査となったのである。しかし、発掘着手前に表面採集調査をしたところ、遺跡であることの立証を得ることなく、発掘調査計画樹立に困惑した。

調査閉会議にて討議した結果、「訳口上」地籍全体にわたって、一つひとつの水田に試掘トレチを設定することにした。沢口上地籍の北端から試掘を進めたが、遺跡を証する結果が、なかなか得られない。表面採集の結果と併せて、遺跡としての登録を取消すかの処置をする今まで考えさせられた。

しかし、試掘最終日に、しかも試掘トレチ設定範囲の最南端で、遺構の一部と出土品を知ることができた。それを発掘することになって、ここに報告した結果を得た。

発掘した住居址は、その所在する水田の南畔寄りに位置し、住居址の南半部は下段の水田造成によってすでに潰滅しているが、奈良時代前半ごろのものと推定できる諸条件を備えていることを知ることができ、貴重な資料を得ることができた。

これらの成果は当初からみると望外なものであり、発掘関係者の一人として喜ぶと共に、調査を直接担当した諸氏の学問的執念によるものと心より敬意を表するものである。

遺跡の発掘調査は破壊である。ことに緊急発掘調査は記録保存とはいうが、まったくの遺跡破壊といつても過言ではない。二度と元の形には戻らない。ひとたび発掘をするからには、条件の許す限り、詳細な調査をし、悔いを後世に残すことのないようにすべきであることを、いまさらのごとくに感を深くした。

下吉田に遺跡のあることを知らなかったという、下吉田区の皆さんにとっては、地元での発掘調査は今回が最初で最後であり、一生一度の幸運といい、総力をあげて御協力をいただいた。明記して感謝の意を表するものである。

上田市文化財調査報告書第31集

訳口上遺跡

訳口上遺跡緊急発掘調査報告書

発行 1988年3月24日

上田市教育委員会

長野県神川沿岸土地改良区

印刷 田口印刷株式会社
